

椎名麟三

梅崎春生

椎 名 麟 三
梅 崎 春 生

新潮社版



日本文学全集 43

椎 名 麟 三
梅 崎 春 生

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／株式会社三秀舎 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返し／特種製紙株式会社

表紙クロス・日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 1967

目次

椎名麟三

深夜の酒宴

五

自由の彼方で

四七

媒妁人

二六七

梅崎春生

風宴

三二

解	年	注	幻	記	ボ	賈	桜
說	譜	解			ロ	の	
			化	憶	家	季	島
					の	節	
					春		
					秋		

本
多
秋
五

四 八 九	四 七 三	四 六 五	三 六 九	三 五 五	三 二 一	二 八 五	二 三 九
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

椎
名
麟
三

深夜の酒宴

一

朝、僕は雨でも降っているような音で眼が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それはスレートの屋根から、朝の鈍い光線を含みながら素早く樋へすべり落ち、そして樋の破れた端から滝となつて大地の石の上に音高く跳ねかえつて沫をあげているように感じられる。しかもその水の単調な連続音はいつ果てるともなく続いていくのだ。ただこの雨だれの音にはどこか空虚なところがある。僕が三十年間経験し親しんで来た雨だれの音には、微妙な軽やかな限りない変化があり、それがかえつて何か重い実質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ単調で暗いのだ。それはそれが当然なのであつて、この雨だれの音

は、このアパートの炊事場から流れ出した下水が運河の石崖へ跳ねかえりながら落ちて行く音なのだ。

だが僕は、このアパートへ来て半年余りになるが、朝眼を覚すと、それが下水の音であるとは知っていないが、どうしても雨が降っているような気分から脱することが出来ないのだ。それほど僕のいるこのアパートには、あの雨降りの陰気な調子が建物全体に沁みわたっているのである。この建物は両国の運河沿いに焼け残つたただ一つの倉庫なのだ。このあたり一面の焼け跡には、バラックがあちらこちらに建っているのだが、その手軽な建物とは対照的に、この建物は現実のように重く無政府主義の旗のように黒く感じられるのである。運送業をしていた僕の伯父が持っていたもので、それを伯父が終戦後アパートに改造したものである。

全く部屋にいと、井戸の底にいたようなのである。僕の部屋は四畳なのだが、押入も戸棚もない。そして天井が思い切り高いのだ。ただ一つの明りが、手が届かないほど高い小窓からやつと部屋のなかに流れ込んでいるだけなので、昼間でも薄暗い。しかもその二尺四方の小窓には、驚いたことには、鉄の格子がはまっ

ているのだ。勿論、倉庫時代の窓をそのまま転用しただけなのである。両方を隣の部屋と区切っている板壁でも真新しければ幾分薄暗さが救われるのだが、それが強制疎開のときの取りこわし材なので何とも救いようがないのだ。そしていつも冷々したかび臭い空気がよどんでいて、それが着物を通して僕の肌に沁み込んでいるので、この間も街を歩いているときに、ふと冷蔵庫の扉をあけたときのような臭いを自分の肌を感じて憂鬱になったことさえあった。しかも湿気がひどかった。寝るときに布団の襟が首にあたるとひやりとして不快だった。ときには原因不明の腐敗した糞味うんみのような臭いとその湿気にまじって襲いかかり、どうにも堪えられないときさえあるのだ。

ことに一日中ほんとに雨に降りこめられているときは、僕は全く息づまりそうになる。刑務所にいたときでさえ、僕は窓から雨のしぶきを胸に吸い、高い塀の赤煉瓦が雨に濡れてわずかに赤味を残した醜い泥色に変わって行くのを意味深く眺めることが出来た。春になれば、鉄格子と鉄網越だが、塀際の乙女椿おんなつばきの咲いているのを見ることが出来た。だがここでは僕はただ部屋

のなかをうろろするだけなのだ。どこから外を眺めることが出来るだろうー 二尺四方の鉄格子の窓は手を伸しても届かないのだ。僕は最初のあいだ気が狂いそうになって、窓というものがあるとすればここになければならないと、そのあたりを思いさま手が痛くなるほどたたいた。僕は普通でない特殊を忌むからだ。

だが残念なことにその外壁だけはコンクリートで出来ているので、ただ僕の手の肉や骨が空虚に鳴るだけなのだ。そのときはきつと刑務所の病棟に半年近く入れられていた狂気が再発しそうな予感に襲われ、已むなく高い板壁に凭もたれて坐り込みながら、ひっそり雨を聴いているより仕方がないのだった。だが今は僕は狙まねいのせられた鯉こいよりもおとなしい。風が吹こうが雨が降ろうが黒い運河に舟が通ろうが、ただひっそり高い板壁に凭もたれているだけなのである。その板壁の僕の頭のある部分には、頭の脂あぶらが黒い染みになって沁み込んでいる。

僕は元来臆病なのだが、それだからまた陽気なことが好きなのだ。誰かが僕に親しく話しかけて呉れたならば、その人と楽しく笑い合うことも出来ると信じて

いる。だが、僕が昔共産黨員であつてしかも在獄中氣が狂つたという理由によつて、アパートの人々は僕の顔やひとり言を薄気味悪そうにしているだけなのだ。

勿論人々は僕と挨拶は交して呉れる。ことに今日はこの挨拶やお天気の話などは、挨拶のなかで一番重要な深い意味をもっているのだから、僕はそれだけで至極満足している。金融措置令がどうなるうが、食糧の配給が遅れようが、そのような話題は僕の一番無意味な話題だ。この点に於て僕は十分形而上学者の資格があるのである。だから今晚米がないと訴えられても僕にはどうしようもない。どうしようもないから憂鬱になつてしまつてゐるより仕方がないのだ。だが人々はその僕を冷酷だと考へて、そこにまた僕の過去を結びつけてゐるらしいのである。

このアパートの人々は僕には古くさい昔話の人々のような氣がしてならない。自然主義リアリズムとかいう小説を昔読んだことがあるが、そのように平凡で古くさくて退屈で、それだからその人々の生活を考へただけで陶酔的ないい気分になることが出来る。たとへば僕の右隣りの部屋には那珂という荷坂夫の一家が住

んでいる。その妻は四十五六の身なりを構わない女だが、十年も喘息をわずらつていて、最近余り堪えがたいので医者に見て貰つたら、胃も悪く心臓も悪く肺も悪いということだった。しかし彼女は寝ても居られず一日中ごそごそ立働いてゐるのだ。彼女のいつもはかけてゐる胸には鎖骨がとび出してゐて、肋骨の数えられる青黄色い薄い胸板には、しなびた袋が醜くぶら下つてゐるのである。そして彼女はそれだけ胸へ手を入れて始終ぼりぼり搔いてゐるのだが、それが何かの虫がゐるようでひどく不潔な感じがするのだ。その上咳をしては、ところきらわず痰をはくので、肺患かも知れないし第一何だかきたならしいからというので、このアパートの隣組の人々は配給物に手を触れられるのを防ぐために、彼女の病身を言い立て氣の毒を理由として配給の当番を免除してゐるのである。

那珂の妻は、いつも困つたような泣くような声でゆつくり話すのだった。その話は大抵自分の夫と十四になるひとり息子に對する愚痴に尽きていた。その言葉の調子は、まるで瀕死の病人が遺言でもするような大儀な哀れっぱさに満ちていて、それが息子への口小言

となると、文字通り一日中続いているのだった。子供が口返答するときはその声は高まり、そうでないときはいつの間にか夫への愚痴になり、それを子供相手に繰り返しているのだった。彼女はいつでも自分の言葉に涙を流すことの出来る他愛のない感傷性を夥しくもっていた。彼女はその夫故にその息子故に、世界中で一番不幸な人間だった。そのためにまた人々から軽蔑されるのだった。そして彼女はこう言っては涙を流すのだった。全くこのような感傷性は我慢がならないものだ。

彼女はアパートの人々に対しても同じ調子だった。彼女は会う人毎に愚痴るので、彼女の家庭の内情はすっかりアパート中に知れ渡っていた。彼女の夫は窃盗の前科が二犯もあった。そして彼は家族に葉っぱだけの雑炊を食べさせても自分は米の飯を食わないと承知しないのだった。殊に三人家族一日分の配給のパンを一度に平げて、そのために自分たちは一日何も食べることが出来なかったというのが、このごろ一番多く繰り返される彼女の愚痴なのだった。しかもその子には子供らしい盗癖があつて、絵本を持って行つたと誰か

が苦情を言いに来ると、いつもの困つたような泣くような声で、

「全くあの子には呆れてるんですよ。わたしのいうことなんか一つもきかないし、ねえ、お姉さん、うちの子はどうしてあんなでしよう？ それに何しろうちの人の兄弟は、みんな手癖が悪いんで、あの子もうちの人の方の血に似たんですよ。……」

と物憂さそうに訴えるのだった。そして愚痴がはじまり、夫や夫の兄弟のために自分はいかに肩身のせまい思いをしているかということをも時間も話しつづけるのだった。しまいには苦情に来た相手は自分の目的などはどうでもよくなり、彼女を慰める自分の言葉に疲れ果てながら引下つて来るのだった。彼女には自分の苦痛が大切なのであつて、他人のそれは少しも感じないのだ。だがそのように愚痴る彼女自身も、今迄に幾度となく、炊事場に置き忘れてあるようなものをだまつて持つて帰つて来ているのだった。

僕の左隣りにいる人々も僕にはやはり重い。書くのも大儀なくらいだ。戸田という夫婦が住んでいるのだ。その妻のおぎんは僕の伯父の仙三を助けて、管理

人と女中の役目を果しているのだ。彼女は三十を半ば過ぎていたが、左の眼のあたりが何か脹^はれてゐる感^{かん}じで、そのためにふと顔が歪^{ゆが}んで見えるのである。彼女は勝気で働き者だ。廊下を掃いたり、やもめの仙三の身の回りの世話をしたり、アパートの配給から菜園の手入まで引受けながら、その上夫の面倒まで引構^{ひかま}えているのだ。彼女がアパートの人々を無作法に呼びつけるのは、このような疲労も原因^{げんいん}しているのである。

だがこのように忙しいおぎんでありながら、隣組の配給やアパートの用事で部屋部屋を訪れるたびに、大抵一部屋で十分も二十分も話し込んでゐるのだ。それにはそれ相当の利益があるのだ。つまりいろんな話を聞き込んで闇取引をする機会があるのだ。いろんな品物を手に入れたり売り捌^{はく}いたりする機会があるのだ。だからこのアパートでは彼女が一番裕福であるかも知れない。アパートの人々は、彼女が余りえらそうにしていると言つて好感を持つて居なかつたが、面と向うと彼女には頭が上らないのだった。

だが夫の戸田も自分の妻のおぎんには全く頭が上らないのである。戸田はおぎんより五つも年下であるせ

いか、おぎんには奴隸のように服従していた。彼は蹠^{はく}写版原紙に製版する仕事をしていたが、二三日机の前で蹠^{はく}の音をさせていたかと思うと、すぐ倦怠を感じるらしく、映画を見に行くのだった。だから一月を通ずると、割のいい仕事なのにその収入は家計費の半ばにも達しないのである。おぎんはアパートの人々の人に知られたくない秘密にも通じていて、人々の弱点に少しの容赦もないのだが、おぎんが一番我慢のならないのは、男の生活的な無能力だった。それでいながら戸田に対する態度はそれと矛盾して、かえつて戸田の責任のない非実際的な性格を愛しているようなのだつた。若しこれが他の男であつたら、それが誰であろうと臆面もなく、「あんたはだらしがえないのね。それではお神さんが可哀そうだ。」とやつつけずには居られなかつたであろう。また彼女にはたしかにそれだけの資格があつた。彼女は立派に家計を支えていたばかりでなく、将来のために貯金^{*}までしていた。彼女はバラックでもいい店を建てて昔のミルクホールのようなものがやりたいのだった。戸田がこの妻に対して頭の上らないのは当然だった。事実戸田のその妻に対する態度

は、罪人が裁判官に対するようだった。彼は始終自分の非実際的な性格を呪っていた。しかしどうすることも出来ないのだった。

永らくこのアパートにいる人でも、戸田の顔を知っている人は少かった。彼はいつも部屋ぶつの隅にひきこもっていて、机の前で鑢きに鉄筆の軋きの鋭い音を立てながら仕事しているか、寝ころんでぼんやり空想しているのだった。彼はアパートの人々に会うのを極度に恐れていた。便所へ行くにも廊下はうかの人の気配けいをうかがっている有様だった。だがたまに人に会うと、うろたえた挨拶をどもり臆病そうに眼を伏せてそそくさとその人から離れるのである。その戸田は全く自分を生きて行く価値のある人間だとは少しも思っていないようだった。それはまるで全世界の人々の非難を一身に負うているようだった。

疲れたつつけんどんな声で人々の名を呼びながら、配給を事務所へとりに来るように伝えているおぎんの声を聞いていると、僕はいつも深い絶望的な気分に襲われるのだ。また隣から聞える那珂の妻の鋭い連続的な咳や、泥棒のように緊張した顔で廊下を便所へ急い

でいる戸田に接すると、僕はまるで永劫えいこくの前に立たされたような憂愁に陥るのである。だが僕の部屋と向き合っている部屋にいる深尾加代という若い女だけは全く堪え難いのだ。どんな不幸でさえも彼女に印をつけることは不可能であろう。僕はその女の鼻にかかる甘えるようなそれでいてどこか遠い声を聞いていると、いつも重苦しい嘔吐おうとのような気分を感じるのである。

おぎんは加代に愛想を尽かしていた。女学校を出ているのに配給の当番のときは必ずと言っていいぐらいに計算を間違えておぎんや皆に迷惑をかけるのだった。そして若い男がいつも入りびたっていてあたり構わない笑声が聞えていたし、配給物を受取る金さえないときが多いのに、いつも牛肉を煮る匂いをさせているのだった。加代がこのアパートに来たのは仙三の關係からだった。加代の母は仙三の妾めかけをしていたことがあるのである。

加代はまだ二十はそちなのだが、彼女は十八で最初の男を知ったのだ。それは戦時中、女学校*女学校の挺身隊で城東の皮革工場に行っているとき、その工員と出来合ったのだ。間もなくその關係を先生に知られて軍需省へ勤

務を變更させられ、敗戦までそこにいた。空襲のために仙三が焼け出されたので、彼女の母は石川へ疎開することになった。そのとき加代は辭職を申出たが、課長は自分の家から通うがいいと言って辭職を許さなかったのだ。課長は家族を疎開させて、かなり大きな家にただひとり住んでいた。

加代は敗戦後もその課長の家にいた。だがある日課長は、家族が疎開先から帰って来るからと言って、僅かの手切金で石川の母のところへ行けというのだ。加代はそのとき素直に肯いたが、田舎へ疎開した母は親戚の強制的な勧めと生活難から中農の隠居へ再婚して居り、その婚家へ行くことは、彼女に想いも及ばなかった。彼女は汽車の切符を買いに行くと行って家を出た。そして何の当もなく新宿や銀座をさまよった。そして日が暮れてから、彼女は母の旦那であつた仙三を思い出したのだ。すると彼女は今朝家を出るときから、心ひそかにこの仙三を当にしていたことに気付いた。彼女は新宿から省線に乗ると、ぼんやり仙三の家に近い両国で降りた。仙三は折好く元の住所にバラックを建てて住んでいた。仙三は加代を見ると眉をしか

めたが、それでも彼女を自分のアパートに入れてやったのである。

アパートへ来てからの加代は、自分の部屋に落ちついていたことはなかった。加代にはいつも未来への漠然とした不安があつた。彼女はその不安をただ漠然と堪えているだけなのだ。それは彼女の眼を見ればよく判るのだ。彼女の「重贖」は何かひどく重い感じだつた。そしてその瞳には動物的な暗さが沁みついていた。だが、頬から口元にかけては幼女のようにあどけないのである。恐らく彼女が老婆になつてもこのあどけなさだけは保たれるだろうと思われるのである。それだからこの顔全体は、不思議に人々を追憶的な氣分にささうのどつた。彼女の客が、殆んど二十前後の青年であることを見ても、その顔が誘惑的なのだということが判るのである。

加代の最初の客はこうだつた。ある夕暮、彼女は両国の駅にぼんやり立っていた。彼女は何かを待っていた。しかし何を待っているのか自分でも判らなかったのである。いろんな男たちが彼女を振り返った。ことに学生服を着て真新しい赤革の手提鞆をもつた青年

が、長い間彼女を見入っていた。そして彼女がその青年に気付くと、青年はふいに顔を赤らめながら、まるでひきつけられるように加代へ近付くと、

「あの、みつ豆でも食べませんか？」

となつかしそうに言うのだった。それは九州から上京して来た医学生だった。今でも彼は自分ひとりでは友だちを連れて加代のところへ来るようである。

僕は何のためにこの手記を書きはじめたのだらう。

このアパートの人々の生活や気分と言ったものを記録しようとしているのであらうか？ 或いは一切が古くさい昔話と交らないということを証拠立てようとしているのであらうか？ いや、これらの人々は僕に深い絶望を与えるのである。僕の心のなかにある或る憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だがそれが却って今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめているのである。勿論その愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寝床へ入るときのような楽しさを与えて呉れるのである。

僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ現在が堪えがたいだけである。現在が堪えがたいからと

言つて、希望のない者には改善など思いがけもないことだ。一体何をどう改善するのか。欲望という奴は常に現実の後から来る癖に、影だけは僕たちの前に落ちているので、その影にだまされて死ぬまで走りつづけるような大儀なことはしたくないだけなのである。だから僕はニヒリストだと思われするのは至極道理だ。だが僕の世界中で一番きらいなものはこのニヒリストという奴なのである。ニヒリストと聞いただけで加代に感ずるような嘔吐を催すのである。僕を強いて差別づけるとすれば——僕はまた、この差別という仕事が大嫌いなのだが——ニヒリストと正反対のものである。勿論、ニヒリストの反対はローマンチストではない。その名前は誰かが考えて呉れるであらう。僕はただ堪えがたい現在に堪えているだけなのである。

二

僕は今日も重い刷毛^{はけ}を背負いながら、銀座の露店からこの本所の一面に帰つて来た。僕は自分の格好を名譽なものとは考えていない。罹災したとき着ていたのだという仙三のよれよれの国民服を着ているのは、そ

れより外に着るものがないからだ。その上に古典的な泥棒然とした大風呂敷を背負って歩いている僕の姿は、とかく人目をひくらしく、付近のバラックの人々もいつとはなしに僕の名を覚えてしまっているくらいだ。そんな格好でゆるゆる帰って来ると、珍らしくまだ暗くならないのにアパートから引上げて来る伯父の仙三に出会ったのである。

仙三は背広姿で、僕に気が付かず歩いて来るのだ。彼はひどい跛^{びつ}だった。だが彼の頑丈な肩や、それに近づいている厚い抑揚のない一枚板のような上半身は、彼の昔の商売を思い出させるのである。彼は仲仕から叩きあげて運送店の主人となり、戦時の企業整備のとき、このあたりの小運送店を合同してその社長にさえなったのだ。だが、今は、この倉庫が一つ焼け残ったきりだった。しかも彼はその空襲のとき、家や妻だけでなく、右脚を足首から失ったのである。

アパートのあたり一面の焼跡には、思い思いのバラックが建っている。それはこのたそがれには、移民の集団住宅のような猥雑^{わいさつ}と疲労が強く感じられるのである。仙三はその間を運河沿いに橋の方へ歩いて来るの

だ。それは歩くというよりよろめいているという方がふさわしかった。跛の方の足がやっと大地に踏み下されると、彼の上半身は倒れんばかりに右へ傾き、それを節くれだった太い木の杖で懸命に支えながら左の方の脚をひきつけるのだが、そのためにしばらく立止っていなければならぬのだ。その都度に、杖がぶるぶるふるえているのである。そして彼は不安そうに、次の足を下さなければならぬ地面をちらりと確めてから、再び運命的な予感のうちに、次の一步が絶望的に踏み出されるのだ。僕はその老人に挨拶をした、「早いお帰りですね、品物の清算は明日にしますか。」

「うむ……」

と仙三は眉をしかめながら、僕をじつと見るのだ。彼の顔は小さいのだが、その顔とは不調和なほど高い鼻は先が尖^{とが}っていて、その鼻の両側には、犯罪人のような陰険な眼が黒く澄み通っていた。頭は真白できちんと五分に刈り込み、皺もない青白い顔には、暗紫色の唇が厚く垂れていた。やがて仙三は眉をしかめたまま不機嫌そうに言った。

「うむ。金沢の息子が死んでな。今晚お通夜^{どくや}なのだ。」

「金沢さんの息子……ああ、あの少年ですか。仕方がないでしょう。」

そして僕たちは何事もなかったように、その言葉を挨拶がわりに行き違ったのだった。仙三は再び運命的な足どりで橋の方へ歩いて行つた。戦時中、欄干の鉄材という鉄材をとり除かれてしまったみすばらしいその橋は、そのために空襲のとき、数十人の避難者を木の上に落してしまつたのだ。仙三はその死の橋の傍に、ブラックを建てて、ただひとりで住んでいたのである。

アパートの廊下にはむせかえるような煙が立ちこめていた。廊下と言ってもいつもじめじめしているたたきの土間で、それが何の奇もなくその建物の中央を縦に一筋につらぬいているだけなのだ。その廊下をはさんで大小とりまぜた部屋が十二室向い合っていて、その端の一室は炊事場と使所に仕切られている。だがその部屋々々の構造や高い屋根裏の棟木から長く吊り下つている暗い電灯の感じや、その建物に沁み込んでいる陰鬱な調子などは、僕の服役していた田舎の刑務所そっくりで、僕が思わず仙三を「御担当さん！」と呼んでしばらく気のつかないことのあつたのは、僕の頭

がどうかしているからではなく、全くこの建物のせいなのである。

僕は部屋へ入って、品物を仕訳しながら売上の伝票を書いた。僕は露店の売子なのである。仙三が知合から刷毛を仕入れる。それを僕が売るわけだ。そして僕は売上の一分を月給として貰うのだ。月百五十円から三百円にはなる。勿論それでは食えないから常に飢えているのである。それに僕は二三日前に、まだ来月までには十日もあるというのに、外食券を食い切つてしまつていた。勿論金なんかあらう筈はない。だが小岩の刷毛屋の間屋へ品物をとりに行つたとき、その主人が僕に何となく米を一升呉れた。そして僕も何となくその米を貰つて来たのだが、そのおかげでやつと今迄凌ぎをつけて来たのである。

売上の一分とはひどいと僕の隣に露店を出しているライター屋がいう。どんなに少くとも一割が相場だと憤慨して甚だ民主的じゃないというのである。そこで僕は仕入から販売まで一手に引受けていて、僕の資本家はこの露店の権利を持つていただけというと、ストライキを起して要求しろという。だが売子は僕ひとり